

I 研究主題

思考力・判断力・表現力の育成を目指した評価の工夫
ー具体的な支援に活かすための判定基準の在り方ー

II 研究主題設定の理由

数値評価ができない小学校外国語活動において、思考力・判断力・表現力の育成を目指すためには、何よりも、教師によってばらつきのある外国語活動の評価を統一し、通知表や指導要録の所見に結びつけるための評価基準がなければならない。児童の現状を把握できなければ具体的な支援はできないし、思考力・判断力・表現力の育成も望めないからである。

そこで、小学校外国語活動では“具体的な支援に活かすための判定基準のあり方”を中心に本研究に取り組み、まず判定基準を作成し、それを確定した段階で支援策を考えて、授業実践を行った。

一方、中学校外国語では、外国語を通じて、生徒の思考力、判断力、表現力の育成を目指した。平成24年の学習指導要領の改訂の趣旨やポイントの説明では、とりわけ次の3要素が重視されている。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 基礎的・基本的な知識及び技能② 知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等③ 主体的に学習に取り組む態度 |
|---|

特に②については、「思考・判断を行うプロセスや結果をどのように表現したかが評価の対象となる」「『思考・判断・表現』の評価の視点としては『自ら考え自分の言葉で表現する』という主体的な思考・判断や表現を重視しなければならない。」とある。

ということは、ただ単に、テスト対策やよい作品が仕上がることだけを目的にするのでは、思考力の育成は望めないと言えるのではないか。生徒の思考力は思考を発揮することで伸長され、それは、問題解決場面において発揮されるのではないか。生徒は問題解決場面に直面することで、これまでの既有的知識から、問題解決に必要な情報を選択したり、引き出したりすることで、「考え方」や「思考の仕方」が身に付いていくと考える。

以上の理由から、問題を解決する場面を設定し、思考力を高める過程を重視し、思考力を判定する判定基準を設定することとした。また、課題に対する出来具合を評価するだけでなく、さらに能力の発揮、伸長を意図した具体的な支援策を試みた。

III 研究内容及び実践例

1 小学校外国語活動

(1) 各学校の実態把握

本研究に取り組むに当たり、各研究員が所属する小学校の指導要録の所見文を分析したところ、以下の2つのパターンに分類することができた。

- ①所見がすべて同じものである。
- ②各児童によって、所見の内容が異なる。

また、所見の書き方にもばらつきが見られ、以下の2つのパターンで書かれていることが分かった。

- ①学期を通しての児童の活動について総括して書いている。
- ②学期に取り組んだ単元の中で、児童が特にがんばっていた単元を抽出して書いている。

(2) 課題

実態把握をしてみると、市内だけでも所見の書き方にかなりのばらつきがあることが分かった。「外国語活動」の評価について、中央教育審議会初等中等教育課程部会の「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」では、次のように示されている。

(太文字下線部は筆者)

○小学校「外国語活動」については、平成20年1月17日中央教育審議会答申において、**数値による評価にはなじまない**とされていること等を踏まえ、現在、「総合的な学習の時間」の評価において行われているような、**評価の観点を設定し、それに即して、文章の記述による評価を行うことが適当**である。

「評価の観点を設定し、それに即して、文章の記述による評価を行うことが適当である」から、3つの評価の観点はあっても、どうなっていればそれらが達成されたといえるのかは示されていない。つまり基準になるものがなく、同じ児童を評価する際、教師によって評価にばらつきが生じることが懸念される。外国語活動の評価の考え方は、「子どものよい点、意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて評価する」ので、文章の記述による評価を行う際、例えば、「積極的に」「楽しそうに」等の表現を用いた場合、どんな状態が「積極的」「楽しそう」なのかは非常に曖昧である。

小学校段階では違うが、外国語は中学校以降、教科として扱われるものである。「小中連携」や「指導と評価の一体化」の点から考えても、この児童は何ができていて、何ができていないのかの実態把握をするための基準と評価が必要である。その基準と評価があるからこそ、その後の具体的な支援ができると考える。

(3) 仮説

【仮説】

明確な基準を作った上で、それに基づいた評価を行えば、学校間の所見文や評価のばらつきをなくすることができるのではないか。

「何のため」に評価を行うのか、また評価されるのだろうか。私たちは次のように考える。分かりたい、伸びたいという児童の学ぶ意欲に応えるためにも、評価する教師だけではなく、児童にとっても分かる判定基準があれば、それをもとにして評価のばらつきをなくせるのではないか。誰にとっても明白な基準が示されることで、教師にとっては、より具体的な支援策を練ることに通じたり、適切な励ましを送ったりすることもできる。児童にとっても、自分が何をすべきか、どんな努力をしたらより力を身に付くのかをつかむことができる。さらに保護者にとっても、児童がかけてほしい言葉がけをしてあげられる前向きな指標となると考えられる。

児童が学習活動を通して課題と向き合い、深く考えたり感じたりしながらよりよい変容を重ねていけるように支援するのが私たちの責務であるのなら、誰にとっても分かる評価基準をつくりあげていくことが必要であると考えます。

(4) 検証

ビデオで聞き取りの活動を再現し、3人の教師が該当児童について、一斉に評価を行うという形で検証を行った。

Activity (25分)

児童の活動	担任	AET	JTE	◆評価規準 <方法> 【観点】
①音声教材で2人が紹介する夢の時間割を聞いて、誌面に書く。 自分の夢の時間割を作り、ペアで尋ね合う。 ペアの相手の時間割を誌面に書く。	AETの説明を補助し、児童がスムーズに活動できるよう支援する。	Hi, friends! P. 35 Activity の説明を行い、児童に取り組みせる。	ICTを操作し、効果的に活動に取り組めるようにする。	◆自分の夢の時間割を作り、友達と尋ね合って、誌面に書いている。<行動観察・誌面点検> 【慣】

①まずそれぞれの基準で、ある児童の活動について評価を行った。

全員一致でAの評価のケース

【理由】

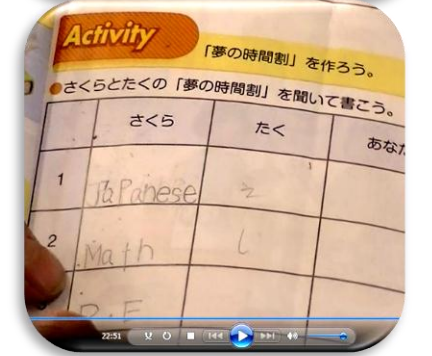
- ・聞き取って書いている。
- ・英語の頭文字でメモをとっていることから、英語を使って書こうとする意欲が見られる。



全員一致でCの評価のケース

【理由】

- ・何も書いていない。



評価がAとBで分かれたケース

評価が分かれたポイントとして、

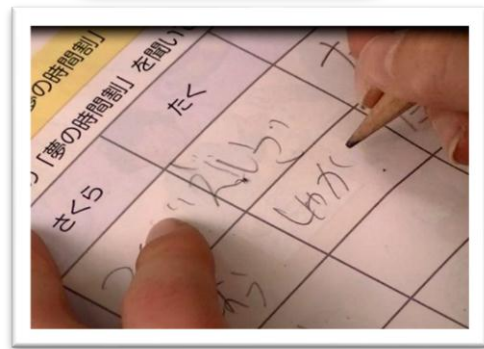
- ・聞いて書いているが、間違いがある。
- ・聞いて書いているが、日本語である。

【Aとした理由】

- ・外国語活動では、完璧を求めていること。
- ・日本語で書いたり、話したりしてもよいこと。

【Bとした理由】

- ・英語で書こうとしていないこと。
- ・課題に対してある程度正答しなければ、既習事項を活用しているとは言い難いこと。



第5学年 Lesson 8 のActivityの様子



<具体的な支援>

指導者の真似をさせながら、既習表現でコミュニケーションをとらせる。

②次に、以下のような評価基準を基に、それによって一斉に評価を行った。

A：「十分満足できる」／B：「おおむね満足できる」／C：「努力を要する」

<Activityについて>

判定	判定基準（項目）	支援策
A	<input type="checkbox"/> Bの項目をすべて満たし、かつ正答率が90%以上である。記述は、日本語で書いても英語で書いても構わない。ただし、英語で記述する際のスペリングの正誤は問わない。	
B	<u>以下の3項目を満たすこと。</u> <input type="checkbox"/> 音声教材を聞いて、さくらとたくの「夢の時間割」を書いている。 <input type="checkbox"/> 自分の「夢の時間割」を誌面に書いているが、正答率が90%未満。 <input type="checkbox"/> 音声教材を参考に、自力で既習表現を使って、友達の「夢の時間割」を尋ね、誌面に書いているが正答率が90%未満。	<input type="checkbox"/> 学級に「黒板の教科絵カードを見ながら、アルファベットで書ける人はチャレンジしてみよう」という声かけをする。 <input type="checkbox"/> 黒板に掲示するPhraseの他に既習表現のフラッシュカードを用意し、指導者がそれを横で見せながら活動させる。
C	<u>以下の項目のいずれかに該当すること。</u> <input type="checkbox"/> 音声教材を聞かずに、さくらとたくの「夢の時間割」を書いている。 <input type="checkbox"/> Activityに取り組んでいない。 <input type="checkbox"/> 日本語で友達とやり取りしている。 <input type="checkbox"/> 既習表現を使うために、全面的な支援が必要である。	<input type="checkbox"/> 間違ふ不安を排除する声かけをし、ICT教材を視聴するよう促す。 <input type="checkbox"/> 「夢の時間割」が思いつかない場合、普段の時間割の中で、好きな曜日の時間割を書くよう声をかける。 <input type="checkbox"/> 指導者の真似をさせながら、既習表現でコミュニケーションをとらせる。

判定基準からの評価

児童O	児童P	児童Q	児童R
全員がAと評価した。理由は、聞いて英語の頭文字で書いており、全て書けてはいないが、90%正解している。	全員がAと評価した。理由は、聞いて書いている。日本語で書いているが全て正解している。	全員がCと評価した。理由は、隣の児童の答えを見て写している。	全員がBと評価した。聞き取って、英語の頭文字で書いているが、半分しか正解していない。

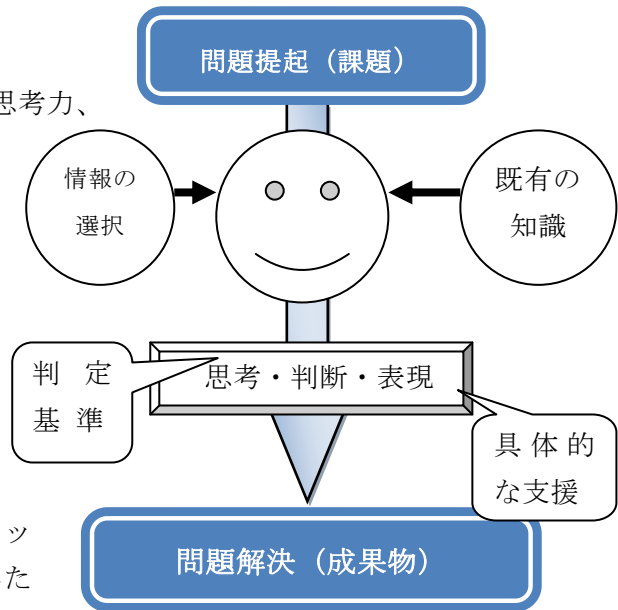
検証では評価がそろわなかった日本語での記入や完答していない場合でも、評価の一致が見られた。このことから、共通の評価基準を設定すれば、別の場所にいる教師が、相談をしなくても同じ評価をすることが可能になると言える。

2 中学校外国語

(1) 思考力を測る

外国語という教科を通じて、生徒に思考力、判断力、表現力を身につけさせたいと考えた時、生徒の成果物だけを評価するのではなく、成果物にいたるまでの過程に着目した。

そこで、生徒の writing 活動に焦点をあて、問題を解決する単元を開発し、問題を解決するためのマッピングの仕方に着目した。そして、問題を解決するため、頭の中にある既存の知識をマッピングを通して、選択したり、引き出したりすることを思考力と捉えた。また生徒が考える具体的なマッピング像を考え、判定基準を定め、具体的な支援策を盛り込んだ。

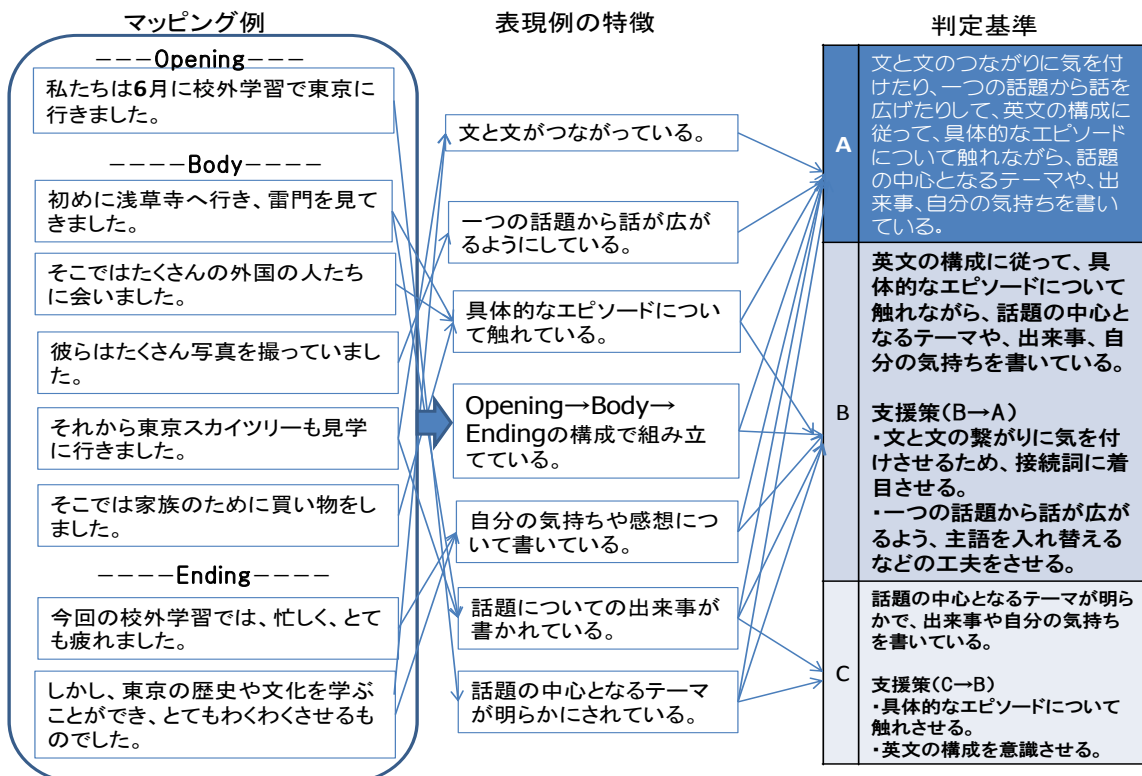


(2) 仮説の設定

「マッピングに具体的な支援策を盛り込んだ判定基準をつくることで、生徒の思考力の育成につながるであろう。」

(3) 検証授業準備

マッピングにおける表現例の特徴と判定基準の相関図 (図 1)



(4) 検証授業① 授業者 所沢市立美原中学校 佐々木 大

①単元名

Writing1「日記②」 SUNSHINE ENGLISH COURSE2 (開隆堂)

②本時の目標

構成を意識して、まとまりのある文章を英語で表現する。

③本時の判定規準

上記 図1 参照

④本時の展開

展開 (40)	○本時の目標提示
	マッピングをもとに校外学習の日記を書こう。
	○英語の文章の構成についての確認
	・サンプル文の過去形の動詞、気持ちが表れている部分や構成のチェック
	○マッピングづくり (ワークシート)
	◇1 校外学習をテーマに、自分がしたことや感じたことを構成に沿って記入。
	◇2 マッピングを基に、英文を仕上げていく。
	・途中で班内で交換し、意見交換を行う。
	・意見交換ののち、再度自分の話題を膨らませていく。
	◇3 英作文の発表活動
	・完成した英文を班内で交換し、読みあう。

(5) 検証授業①の振り返りと検証②に向けた改善策

成果としては、マッピングに沿ってほぼ全員が英作文を完成できた (35人クラス中 30名が完成、英作文未完成が4名、マッピング未完成が1名)。既習表現を用いて、テーマに沿って英作文を作成していた。英語が苦手な生徒は、周囲の支援を受けながら、マッピングをもとに英作文を完成した。一方で、検証授業①の取り組みでは、完成させた生徒についても、文と文のつながりが弱く、全体としてまとまりに欠けるという課題も見つかった。特に、文と文をつなげる表現については、マッピング段階から単文の寄せ集めという形になってしまい、こちらが想定する A 評価に達した生徒はいなかった。

B 評価の生徒のマッピング (左) と英作文 (右) の例

(テーマに沿って事実や出来事が書かれており、文法の間違い等もあまりないが、マッピング時点で接続詞や文をつなげる表現を取り入れていないため、まとまりに欠ける印象である。)

★構成を考えてそこから日記を書いてみよう。はじめに (Opening) →展開 (Body) →まとめ (Ending)

●はじめに (中心となる話題)

ex. 校外学習があった。 We had a school trip to Tokyo in June.
浅草へ行った。 We went to Asakusa in June.

浅草(上野)へ行った。(校外学⁷⁰)

●展開 (具体的にどんなことがあったか、どんなことをしたか)

ex. スカイツリーを見た。買い物をした。

せんそうへ行った

浅草博物館へ行った。写真を撮った。

スカイツリーへ行った。

しんじょうきを食べた。

●まとめ (自分の気持ちや感想、印象)

ex. 東京の文化 (culture) や歴史(history)について学ぶことができた。

とても楽しかった。とても勉強ができた。

★上で書いたことを基に、順番通り英語で日記を書いてみよう。

Opening
I went to Asakusa and Utsunomiya school trip.

Body
I went to National science museum, I did some shopping there.

I ate Monja Yaki. I took a lot of pictures there.

I went to Tokyo Skytree, I saw many Chinese students there.

Ending
I was very hot so I was tired, but I was very happy.

・接続詞が使われておらず、文と文のつながりが弱い。

・主語が I のみで、単文の羅列になっている。

C 評価の生徒のマッピング

★構成を考えてそこから日記を書いてみよう。はじめに (Opening) →展開 (Body) →まとめ (Ending)

●はじめに (中心となる話題)

ex. 校外学習があった。 We had a school trip to Tokyo in June.
浅草へ行った。 We went to Asakusa in June.

校外学習があった。ソラマチへ行った。

●展開 (具体的にどんなことがあったか、どんなことをしたか)

ex. スカイツリーを見た。買い物をした。

スカイツリーを見ました。ソラマチへ行った。

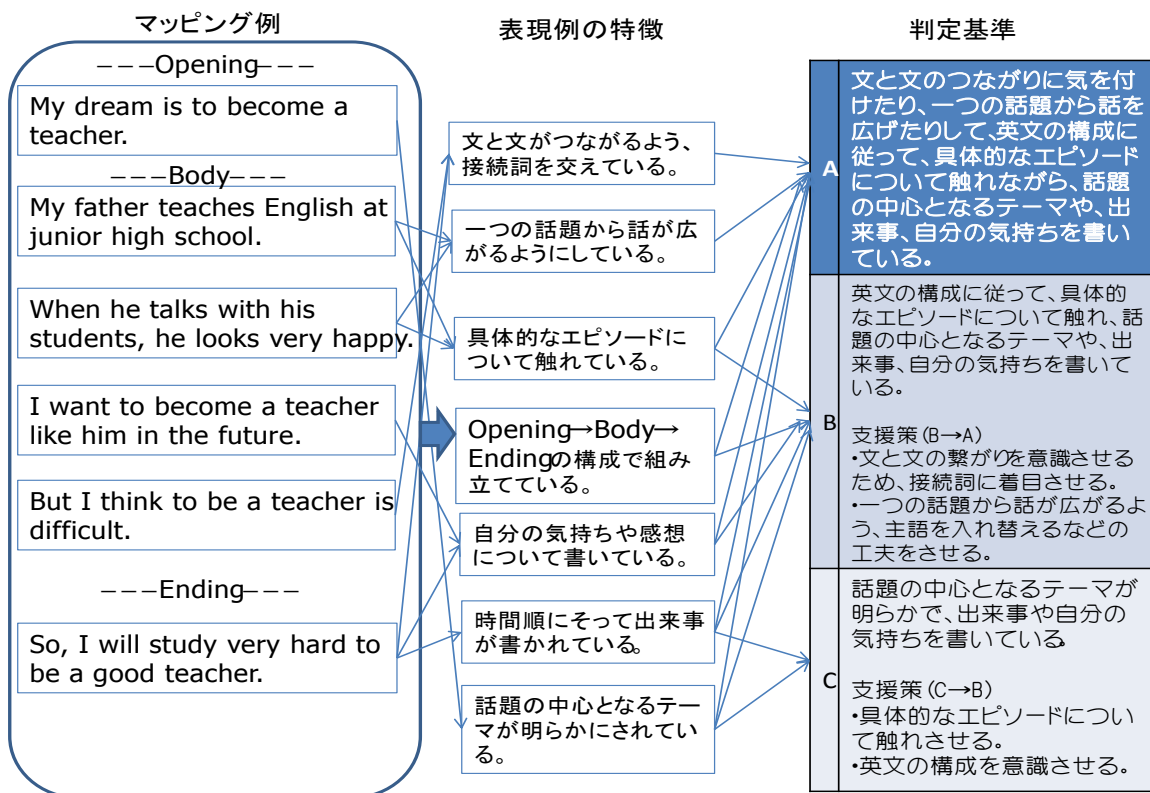
・マッピングは完成していないが、話題の中心となること (校外学習へ行った。) や出来事 (ソラマチへ行った。) が書かれている。

そこで、検証授業②では、「将来の夢」をテーマとして設定し、上記の課題改善のため、判定基準の見直しと、その支援策を指導法に取り入れたうえで検証をしていった。おもな支援策と判定基準については以下のとおりである。

◎支援策

- ①英文を見比べ、文と文をつなげる要素は何かを生徒自身に発見させる活動の導入
→**英文の構成要素の分析**
- ②マッピングを、検証授業①のような縦型の形式で考えさせるのではなく、一つの話題からどのように話題を広げることができるか考えさせる形式への変更
→**放射状形式のワークシート（図3）**
- ③最終的に英作文へと発展させることを意識させるために、マッピング段階から英語化する形式への変更
→**マッピングの英語化**

マッピングにおける表現例の特徴と判定基準の相関図（図2）



(6) 検証授業② 授業者 所沢市立美原中学校 佐々木 大

①単元名

My Project5 「将来の夢を語ろう」 SUNSHINE ENGLISH COURSE2（開隆堂）

②単元の目標

文と文のつながりを意識し、テーマに沿ってまとまりのある文章を英語で表現する。

③本時の判定規準

上記 図2 参照

④指導計画（3時間構成）

時間	学習活動
1	<p>まとまりのある英作文の秘密を見つけよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英作文を見比べ、まとまりのある英作文を構成する要素を個人やグループで考える。 ・それぞれの仮説を基に、既習のスピーチ等をもとに分析をしていく。
2 (本時)	<p>まとまりのある英作文を作るための基礎を考えよう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の学習をもとに、ワークシートを用いて「将来の夢」の英作文の構成を練る。 ・まとまったものを基に、英作文の試作品を作る。
3	<p>「将来の夢」について、マッピングをもとにまとまりのある英作文を作ろう！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・I want to ~の表現を用いた文を完成させる。（文中のどこで用いてもかまわない。） ・構成や文と文をつなげる語句のヒントをもとに英作文を完成させる。

⑤本時の展開

展開 (40)	<p>○前時の確認</p> <p>○本時の目標提示</p> <p>まとまりのある英作文を作るための基礎を考えよう！</p>
	<p>○マッピングづくり（ワークシート）</p> <p>◇1 英作文のもとになる言語材料の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Hints、自分で役に立ちそうな表現を探す。 <p>◇2 テーマの決定</p> <p>◇3 テーマから話題を膨らませていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・途中でグループ内で交換し、意見交換を行う。 ・意見交換ののち、再度自分の話題を膨らませていく。 <p>◇4 英作文の試作品作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語でのマッピング活動を行う。

- ⑥生徒のマッピング成果物と英作文完成品
 (検証授業①での評価 B 検証授業②での評価 A) (図 3)

3. 作文を作るために、テーマからどのように話題が膨らんでいくか、自由に考えてみよう。

- ・接続詞を交えて文と文がつながるよう工夫している。(検証授業①での課題)
- ・一つの話から吹き出しを付けたし、話を広げている。(検証授業①での課題)
- ・テーマや構成に沿って、具体的なエピソードに触れながらマッピングをしている。

同生徒による英作文完成品

2. 「夢の事」についての短文(完成版)を授業以上の時間で書こう!

●Opening
 Do you have a dream?
 My dream is to become a marathon runner.

●Body
 Do you know Mr. Seko? He was great marathon runner. I like him very much, so I want to become a marathon runner like Mr. Seko. To be a marathon runner is very difficult. To be a marathon runner, I must practice very hard. If I can practice hard, I'll become a great marathon runner. If I come true my dream, I will win the WMM!

●Ending
 I always have a dream and Never give up. I believe myself.
 Thank you.

* WMM: ワールドマラソンメッセーجز: ホスト、ニューヨーク、シカゴ、ロンドン、ベルリン。来週で開かれ、世界的マラソン大会のこ。またマラソンは今年Wに加わ。

★今日の学習目標と達成度 評価(A)
 A: 条件をクリアし、前問よりもよい作文を作ることができた。
 B: 前問よりもよい作文を作ることができた。
 C: 作文作成に取り組むことができた。

今日の英作文づくりを通しての感想
 自分の夢について精一杯書いたのじまか、まだ

- マッピング活動からできあがったアイデアを、取捨選択しながら、最終的に一つのテーマに沿ってまとまりのある英作文に仕上げている。

IV まとめと今後の課題

1 まとめ

(1) 小学校外国語活動

本研究に取り組んだ結果、判定基準が明確にし、それに基づいて評価を行った結果、学校間の評価のばらつきをなくすことができた。

(2) 中学校外国語

今回の研究で、思考力育成のために、場面設定をし、成果物ではなく、その前段階のマッピングで判定基準を作成した。また、1回目の検証授業でA基準（またはB基準）に達しなかった生徒に対しての支援策を柱として、2回目の検証授業の単元案を作成した。こうした取り組みが、学習した表現をどのように用いて文章を作成していくのか、表現の取捨選択や、役に立ちそうな表現を発見していくといった、生徒が必要な情報を引き出していく思考力育成の場面設定につながった。生徒自身にとっても、「将来の夢」での自己評価では半数以上の生徒がAをつけた。

2 今後の課題について

(1) 小学校外国語活動

今回の研究では、第5学年のLesson8という一単元の評価規準から、判定基準と支援策を作ることはできなかった。だが通知表あるいは指導要録の所見は、学期ないし年間を通しての評価になるため、全教員がある児童を見取った場合の評価に加えて、所見文作成のための各単元もしくは全単元に共通する判定基準の作成が必要である。合わせて、各単元の評価が積み重なるような振り返りシートが評価物として残ることが望ましいと考える。

(2) 中学校外国語

①文法の事項の定着

テーマについて書いたり、全体的には話題を広げている生徒についても、語彙の定着が未熟であることがうかがえた。また、語彙や文法が定着していない生徒の中には、文をつなげるための接続詞の使い方が適切でなかったり、すべての文を接続詞でつなげてしまう生徒もいた。語彙や文法については、復習の機会を設け、接続詞についても適切に用いる場面を設定し、定着を図っていくことが今後の支援策となる。

②話題を広げることの難しさ

検証授業②で行ったマッピングについて、接続詞や、そこからつながる話題をヒント形式にした（図3参照）。だが、一通り枠は埋められるが、発展させて、自ら話題を広げていくことができた生徒はごく少数であった。時間的な配分や、生徒が自分の力で一つの話題を広げていく力を育てきれていないということが言える。話題の広げ方に注目させるような読む活動をたくさん取り入れていきたい。

③話し言葉と書き言葉の区別

教科書の本文を参考にすると、聴衆に対して、問いかけを行っている表現が多く見受けられる。そのような表現を英作文の中に取り入れている生徒が多くみられた。しかし、中にはその表現を多用し、会話をしているような作品もあった。このような生徒にはマッピング段階で、飾り言葉や広げる表現などをカテゴライズさせることを指導していきたい。